



TITLE:

會社使用人ノ慰勞賞與金ニ對スル 所得稅賦課問題

AUTHOR(S):

神戸, 正雄

CITATION:

神戸, 正雄. 會社使用人ノ慰勞賞與金ニ對スル所得稅賦課問題. 經濟論叢
1917, 5(1): 110-123

ISSUE DATE:

1917-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127230>

RIGHT:

學大科法學大國帝都京

經濟論叢

號一第 卷五第

行發日一月七年六正大

論說

生物進化論ノ誤解……………

理學士 川村多實二

露國ノ資本主義ト最近ノ大革命(二)……………

米田庄太郎

飛脚ノ變遷(二)……………

法學士 本庄榮治郎

現代的保險ノ成立(二)……………

法學士 小島昌太郎

時事問題

英國特惠稅問題……………

法學博士 戸田、海市

會社使
用人ノ慰勞賞與金ニ對_{スル}所得稅_{賦課}問題……………

法學博士 神戸正雄

雜錄

經濟雜話(一〇)……………

法學博士 田島錦治

所謂“Welfare Work”ニ就キテ……………

山本美越乃

群馬縣ノ製絲業……………

法學士 河田嗣郎

基礎社會ノ發達ニ就イテ……………

文學士 高田保馬

國民經濟講話及貧乏物語_{ヲ讀ム}……………

瀧本誠一

會社使用人ノ慰勞賞與金ニ對スル

所得稅賦課問題

神 戶 正 雄

緒 言

最近京都下京稅務署ガ自大正二年四月至大正四年九月五營業期ニ於ケル京都電氣鐵道株式會社ノ職員職工工夫雜役ニ給與シタル慰勞手當金ニ對シテ第一種所得稅金ノ追徵ヲ通知シテ來タ。同稅務署ガ斯カル追徵ヲ爲スニ到ツタノハ、同稅務署ガ會計檢査院ノ檢査官ノ爲メ指摘セラレタルヨリ、已ミナク斯カル命令ヲ發スルコトトナツタノデ、之ニツキテハ目下該會社ヨリ異議ノ申立ヲ爲シ行政裁判所ニ於テ審議中トノコトデアリ、行政裁判所ヨリハ本件ニ關シ參考ノ爲メ京都商業會議所ヘ意見ヲ徵シニ來タトノコトデアル。當業者及其利益ノ保護者ノ立場ニ在ル商業會議所トシテハ夫ノ命令ノ不當ヲ主張シ、之ニ好都合ナル答申ヲ爲ス所デアラウガ、吾々局外者タル學究ノ立脚點カラハ更ラニ獨立ナル意見ヲ發表スルモ差支ナカラウ。特ニ此問題ニツイテハ予ガ年來解釋論トシテ并ニ立法論トシテ興味ヲ以テ研究シツツアリタルコトナレバ、茲ニ此機會ニ臨ミテ卑見ヲ述ヘ、以テ當局當業其他諸賢ノ參考ニ供シタイト思フ。

一 判 決 例

予ノ本問題ニ關スル意見ヲ述フルノ前ニ、一應行政裁判所ノ之ニ關スル判決例ヲ調ブルコトガ肝要デアラウ。之ニ依ルト新舊異リタル又ハ矛盾シタル判例ガアツテ、極新シイ判例ニ於テハ問題トナレル會社使用人ノ賞與金ハ會社ノ損金ト見做シ、第一種所得稅ヲ課スヘキモノデナイコトニナツテ居ル。左ニ各判例ヲ擧ゲヤウ。

(一) 舊判例——課稅スヘキモノトス。

(A) 會社ノ賞與金及交際費ノ如キハ畢竟會社ノ利益金ニ就テノ處分タルニ外ナラサレバ、所得稅法第四條第一項第一號ニ所謂總損金ノ中ニ包含スヘキモノニ非ズ。(明治三三、一一、一二、判決)

(原告主張)——役員及社員ノ賞與金及交際費ナルモノハ會社ガ事業年度毎ニ其事業ノ狀況ヲ比準シ、相當ノ金額ヲ役員及社員ニ支給スルモノニシテ、役員及社員ニ給スル俸給ト敢テ異ル所ナシ。蓋シ會社ノ役員及社員ノ俸給ハ通例少額ニシテ、其年度ニ於ケル勞ニ酬ユルニ足ラザルヲ以テ、何レノ會社ニテモ俸給以外ニ相當ノ賞與金又ハ交際費等ヲ給付スルノ規定ヲ設ケザルモノナシ。

(被告主張)——右賞與金及交際費ハ役員及社員ノ俸給ト其性質ヲ異ニスルモノニシテ、俸給ハ事業年度内ニ於テ其債務發生シ損益ノ有無ニ拘ラズ支給スヘキモノナルモ、賞與金及交際費ニ至テハ事業年度内ニ於テ債務ノ發生スヘキモノニ非ズシテ、年度後ニ至リ會社ノ損益ヲ計算シ、益金アル場合ニ於テ初メテ債務ノ發生スヘキモノナリ。故ニ益金ナキトキハ其債務ノ發生セザルコト明ナリ。然レバ賞與金及交際費ハ年度經過後ニ至リ純益金即チ所得金中ヨリ支拂ハルヘキモノニシテ、年度内ニ於ル財産上ノ減額即チ損金ト見做スヘキモノニ非ズ。換言スレバ賞與金及交際費ノ支拂ハ各種積立金ノ如ク純益金ノ處分

時事問題

會社使用人ノ慰勞賞與金ニ對スル所得稅賦課問題

第五卷 (第一號一二二) 一一一

タルニ過ギズシテ、損金中ニ算入スヘキモノニ非ズ。

(判決理由)——案ズルニ役員及社員ノ賞與金及交際費ハ俸給又ハ給料ノ如キ(1)會社損益ノ有無如何ニ拘ラズ會社ノ義務トシテ支給スヘキモノト其性質ヲ異ニシテ、(2)純ラ會社ニ利益金アル場合ニ限り給與スヘキモノニシテ、右賞與金及交際費ハ畢竟會社ノ利益金ニツキテノ處分タルニ外ナラズ。

(B)會社使用人ノ臨時手當金ハ會社ガ當該年度ノ利益ヲ豫想シ、其一部ヲ使用人ノ勤勞ニ應シテ配當スルモノト認定スルヲ相當トス。(明治四三、一二、二、明治四四、二、二〇判決)

(判決理由) 孰レモ其事業年度ノ末日即チ前半年度分ハ三月三十一日、後半年度分ハ九月三十日ニ支拂ヒ、又其金額モ常ニ同一ナラサルコト明ナリ。此等ノ點ヨリ之ヲ見ルトキハ、係爭臨時手當金ナルモノハ、原告會社ガ當該年度ノ利益ヲ豫想シ、其一部ヲ使用人ノ勤勞ニ應シテ配當スルモノト認定スルヲ相當トス。然ルニ原告ハ——年度分ハ全ク株主ニ配當スヘキ利益ナキニ拘ラズ使用人臨時手當金ヲ支拂ヒタルコトヲ立證シ、臨時手當金ハ毎年度必ズ支拂フヘキモノニシテ、宛モ使用人ノ月給ト同シク通常經費ニ屬スルモノナリト主張スレトモ、同年度ニ尙ホ——ノ利益金アリ、使用人臨時手當金ハ利益中ヨリ支拂ヒタルコト明ナレバ、之ヲ以テ該手當金ハ利益配當ニ非ズトイフヲ得ズ。尙ホ原告ハ法人ノ利益配當ハ商法第五百十八條ニヨリ、毎配當期日ニ總會ヲ開キ、之ヲ決議スヘキモノナルニ、本件臨時手當金ハ此手續ニ依ラズ、配當決議前ニ經費トシテ支拂ヒ了リ、精算上利益金トシテ存在セザル以上、利益配當ト見ルヘキモノニ非ル旨主張スレトモ、右ハ原告會社ガ商法所定ノ手續ヲ履マザルニ止マリ、之ニヨリテ該手當金ノ性質ヲ定ムルコト能ハザレバ、此主張ハ採用シ難シ。又原告ハ——ノ臨時手當ノ如キハ所謂利益ヲ配當シタルモノニシテ、本件ノ臨時手當金ハ此ト其性質ヲ異ニスルモノナリト主張ハレトモ之ニヨリ或事業年度ニ於テ使用人ノ慰勞金ヲ利益中ヨリ支拂ヒタルコトヲ決算上ニ明示シタルヲ證スルニ止マリ、本件ノ臨時手當金ガ利益金ノ處分ニアラザル證ト爲シ難シ。

(二)新判例——課稅スヘキモノニ非ズトス。

(A)原告會社が其使用人ニ俸給給料以外ニ支給スル手當金(賞與金)ハ、原告が開業ノ翌事業年度ヨリ毎事業年度支給シ、事業年度ノ損益決議前ニ支出スルノ計算ニシテ、而モ其給與カ利益金ノ處分ナルコトヲ認ムヘキ證據ナキトキハ、所得決定上ニハ會社ノ損金トシテ計上スルヲ相當トス。
(大正六、二八、判決)

(原告主張) 原告ハ賞與金ニツキ其支給額豫算、支給ニ關スル内規、俸給額ニ對スル一定割合ノ標準ヲ定メタルコトナク、決算期ノ終ニ於テ支給スヘキ總額ヲ定メ、其配當ハ之ヲ支配人ニ一任シタリト雖モ、原告ノ方針トシテハ給料ヲ成ルヘク支給引下ケ、而モ勤メ向テ獎勵スル爲メ、手當ヲ比較的多ク給與セリ。斯ノ如ク會社ノ損益ノ如何ニ拘ラズ給與スル手當金ハ即チ名義ノ異レル俸給ト同一ナレバ、原告ノ經費ノ内ニ算入スヘキモノニシテ、被告主張ノ如ク利益金ノ處分ニ非ズ。

(被告答辯) 使用人ノ手當金即チ賞與金ハ使用人ノ勤怠ノ狀態ニヨリ會社カ任意ニ其給否及支給額ヲ定ムルモノニシテ、會社ガ契約ニヨリ一定額ヲ必然的ニ給與スヘキ義務アル俸給給料ト異ルノミナラズ、俸給給料ハ利益ノ有無ニ拘ラズ必然的ニ支給セサルヘカラサルニ反シテ、手當金ハ利益ヲ條件トシ、利益アル場合ニノミ給與スルモノナルコトハ原告會社ノ既往ニ於ケル手當金支給ノ實蹟ニ徴シ明ニシテ、二者ヲ混同視スルハ不當ナリ。

(判決理由) (1)被告ハ原告カ其使用人ニ俸給給料以外別ニ支給セル手當金(賞與金)ヲ以テ利益ヲ條件トシテ支給スルモノニシテ利益金ノ處分ニ外ナラズト主張スルモ、手當金ハ原告ノ開業ノ翌事業年度ヨリ毎事業年度支給セルモノナルコトハ被告提出ノ書面ニヨリテ之ヲ認メ得ヘク、(2)又其事業年度ノ損益計算ヲ株主總會ニテ決議スル前ニ支出スルノ計算ナルコトハ事業報告書ニヨリテ之ヲ認メ得ベシ。(3)而モ其給與ガ利益金ノ處分ナルコトヲ認ムヘキ何等ノ證據ナキガ故ニ、本件ノ手當金ハ之ヲ原告ノ總損金ニ計上スルコトヲ相當トス。原告ハ其給與ノ義務ヲ契約ニヨリテ負擔セルニ非ズ、又其支給ニ關スル何等ノ規定ヲ設ケタルコトナク、且ツ原告ヨリ所轄稅務署ニ提出シタル原告ノ使用人ノ所得調書ニハ單ニ俸給給料ノミヲ記載シ、手當金ヲ記載セサルモ、此等ノ事實ニヨリテハ本件手當金カ利益金ノ處分ナリトハ認メ難シ。

(B) 商法ノ規定ニ依ル株主總會ノ損益決議前毎決算期ニ於テ使用人ニ俸給以外ノ金圓ヲ給與スルヲ常例トスル會社ガ、其常例ニ從ヒ會社經營上ノ必要經費トシテ支出シタリト認ムヘキ慰勞費與ハ當該年度ノ損金トシテ所得ヲ算出スヘキモノニシテ、或事業年度以前ハ損益ノ如何ヲ問ハス給與セズ、給與ニツキ使用人トノ間ニ契約ナク、又内規ヲモ定メズ、又給與額決定ノ標準ヲ定メタルモノナキモ、前示支出ヲ損金ニ非スト爲スヘキニ非ズ。(大正六、二、一三、判決)

(原告主張) 原告會社ノ店員慰勞會費ハ會社必須ノ經費ニシテ、該經費タルヤ、每事業年度ノ終ニ於テ決算ヲ爲スニ先ダテ、當期中ニ於ケル使用人ノ勤務ヲ調査シ、慰勞ノ目的ヲ以テ給與セルモノニシテ、必スシモ利益アリタル場合ニノミ給與シ又ハ利益ノ多寡ニヨリテ給與ノ歩合ヲ定ムルコトナク、每期略ホ同額ノ給與ヲ爲シ來レルモノナリ。一、若干ノ損失アリタル場合、ニモ全然其給與ヲ杜絶スルコトナク、尙ホ相當ノ給與ヲ爲シ來レル實狀ナリ。要スルニ慰勞會費ハ使用人過度ノ勞役ニ酬ユル手當金ニシテ、會社ノ事業經營上必須ノ經費ニ屬シ、決算モ亦之ヲ扣除シタル殘額ニヨリテ爲シ來レルコトハ各證憑ニヨリテ明ナル事實ナリ。

(被告答辯) 本件ノ爭點タル店員慰勞會費ナルモノハ單ニ原告會社カ從來店員慰勞費與金トシテ支給シ來レルモノノ名稱ヲ變更シタルニ過ギズシテ、該會費ヲ以テ使用人獎勵ノ費用ヲ支辨シタルモノニ非ズ。其性質ハ依然トシテ原告會社ガ使用人ニ對シ、其期ノ通常勤務ニ對スル勤務ノ程度ニ應ジ、慰勞ノ目的ニテ任意ニ給料以外ニ一定ノ金額ヲ給付シタルモノニシテ、慰勞費與金ノ性質ヲ有スルモノナリ。而シテ(1) 慰勞費與金ハ必スシモ每事業年度ノ決算終了後ニ於テ之ヲ支給スルコト及利益ノ多寡ニヨリ非合テ定ムルコトヲ必要ト爲スモノニ非ズ。又使用人ニ對シ一定ノ給料以外ニ其勤務ノ程度ニ應ジ、實與其他ノ名稱ヲ付シ利益ノ幾分ヲ贈與スルハ一般ノ慣例ナリ。(2) 原告ガ假令明治四十四年下半期ノ決算ニ際シ其期ノ利益寡少ナリシ爲メ、其幾分ヲ經費ヨリ支出シ、利益以上ニ實與金ヲ給付シタルノ事實アリタリトスルモ、此等ノ事實ニヨリテ、前示ノ給與ガ慰勞費與金タルノ性質ヲ變更スルモノニ非ズ。(3) 又本件支給ニツキテハ原告ト使用人トノ間ニハ契約ナク、又原告ハ

支給ニ關シ内規ヲ定メタルコトナク、一事業年度ノ終ニ其年度ニ屬スル金ヲ以テ支出シ、其支出額ハ或ハ俸給ヲ標準トシ、或ハ勤惰ヲ標準トシ、其標準ハ一定セズト申立テ居レリ。

(判決理由) 商法ノ規定ニヨル株主總會ノ損益決議前毎決算期ニ於テ使用人ニ俸給以外ノ金圓ヲ原告ガ給與スルコトハ明治四十三年下半期事業年度以來ノ常例トスル所ニシテ、此常例ニ從ヒ原告ガ會社經營上ノ必要經費トシテ支出シタリト認ムルヲ相當トスル本件慰勞會費ノ給與ハ之ヲ原告會社ノ當該年度ニ於ケル損金ニ計算シテ、其所得ヲ算出スルハ不當ニ非ズ。明治四十三年下半期事業年度以前ニ於テハ店員慰勞賞與金ヲ給與セズ、又店員慰勞賞與ノ給與ニツキ原告及店員間ニ何等ノ契約ナク、原告ハ之ガ給與ニ關シ何等ノ内規ヲモ定メタルコトナク、又給與額ヲ決定スル標準ヲ一定セザルモ、之ガ爲メ本件店員慰勞會費ガ原告ノ損金ニ非ズト爲スヘキニ非ズ。

(三) 參考判例(ムシロ新判例ニ有利ナル)——鐵道院ヨリ受クル慰勞賞與金ハ其性質臨時偶發的ノモノニ非スシテ、其金額ヲ豫定シ得ルモノナレバ、之ヲ所得税法ニ所謂手當金トシテ第三種所得ニ計算スヘキモノトス。(大正四、三、一五、判決)

(原告主張) 豫算ハ單ニ鐵道院總裁ニ賞與ノ財源ヲ供スルニ止マリ、本件賞與ハ法令ニ基クモノニ非ズ。賞與金額取調心得ナル規定ハ鐵道院總裁ガ自由ニ改廢シ得ヘキモノニシテ、何等ノ羈束力ナシ。要スルニ本件賞與ハ其給否及金額共ニ鐵道院總裁ガ原告ノ勤惰及成績ニ對スル認定ヲ基本トシ、全然自由ニ決定シ得ヘキモノニシテ、原告ニ請求ノ權利アルニ非ズ。又其給否及金額ヲ豫算シハ原告スルヲ得ザルモノナリ。

(判決理由) 本件所爭ノ收入ノ性質ガ臨時偶發的ノモノニ非スシテ、其金額ヲ豫定シ得ル以上ハ、其所得者ガ之ニ對スル請求權ヲ有スルト否ト、又所得者ガ申告ノ際其金額ヲ確定シ得ルト否トヲ問ハズ、之ヲ所得税法ニ所謂手當金トシテ、第三種所得ニ計算スヘキモノトス。而シテ(1) 本件所爭ノ收入ガ其性質上支給セラルルヲ常態トシ、普通ノ事情ノ下ニ於テハ其給與額ヲ豫算シ得ル(2) 本件慰勞賞與ニ支給ノ目的ヲ以テ當該年度豫算ニ金額ヲ計上シアル以上ハ云云。

以上ノ判例ヲ綜合スレバ左ノ如クナル。

(一) 舊判例ノ下ニ於テハ會社使用人ノ手當金ハ重役ノ賞與金ト共ニ、會社ノ利益金中ヨリ支出セラ
ルモノトシテ、第一種所得稅ヲ賦課スヘキモノトナツテ居ツタ。隨フテ反面ニ使用人ノ處ニテ
ハ此手當金ニツキ第三種所得稅ヲ課セラルルコトトナラナカツタ。併シ

(二) 新判例ノ下ニ於テハ右手當金バ

(A) 多クノ場合ノ如ク其給與カ利益金ノ處分タルコトノ證據ナキトキハ會社ノ經費トシテ隨テ損
金トシテ計算シ、第一種所得稅ヲ課セナイコトニナル。但シ其反面ニ於テ使用人ノ處ニテ此手當
金ニツキ第三種所得稅ヲ課セラルルコトトナルノハ勿論デアル。

(B) 少數例外ノ場合ナルヘキガ、其給與カ利益金ノ處分ナルコトノ明ナル證據アルトキハ即チ例
之イ事業年度ノ損益決議ニヨリテ支出シ(ろ)又ハ事業年度毎ノ利益金ノ一定歩合ヲ配當スルノ内規
ヲ設ケ又ハ斯卡ル歩合ヨリ計算配當サレタルコトノ明カナルダケニ於テハ、會社ノ利益中ヨリ支
出サルモノト見做シテ、第一種所得稅ヲ課スヘキモノトナル。隨フテ反面ニ使用人ノ處ニテハ
此手當金ニツキテ第三種所得稅ヲ課セラルルコトトナラヌ。

二 卑 見

(上) 解釋論トシテ

(一) 積極的卑見——今日ノ判例ニ依レバ前段末項ニイヘル如クデアルガ、予ヲ以テ見レバ此判例ガ

當ヲ得ヌト思フ。然リトテ舊判例モ亦當ヲ得タリトハイヘナイ。予ノ見ニ依レバ會社使用人ノ賞與手當金ハ其性質上一部給料デアツテ、一部利益配當デアル。兩者ノ割合ハ具體的ノ場合ニヨリテ異ルガ、兎モ角通例ハ此二ノモノヨリ成ル。時トシテ利益配當ノ分子ノ全クナキコトハアル（會社缺損又ハ小利益ノトキニ尙ホ支給サルルモノノ如キ）ガ、併シ給料の意義ノ之ナキコトハ殆ンドナイトイフテ良イ。夫ノ新判例ニ於テ所謂、其給與ガ利益金ノ處分ナルコトノ明ナル證據アルトキ（事業年度ノ損益決議ニヨリテ支出シ、又ハ事業年度毎ノ利益金ノ一定歩合ヲ配當スルノ内規ヲ設ケ又ハスカル歩合ヨリ計算配當サレタルダケデハ）ト雖モ、尙且ツ其支給サルル賞與金ニ給料の分子ナシトハイヘナイ。其支給金ガ偶々利益ニ對スル割合ヲ標準トシ、又事業年度ノ損益決議ノ際ニ決定サレタカヲトイフテ、其ガ本來給料ノ意義ヲモ備フルコトヲ否定スルヲ得ヌ。會社使用人ノ給料（名義上ノ）ハ通例割合ニ低ク、時ニハ頗ル小ク定メラレ、彼等ハ初メヨリシテ之ヲ以テ給料ノ全額トハ見テ居ラス。他日決算期ニ至テ賞與金ノ交付サルルコトヲ期待シテ平素低額ナル給料ニ甘ンジテ居ルニ過ギヌ。假令法律上ノ權利トシテ要求スルコトノ出來ナイニセヨ、常例上貰ヘルモノトシテ賞與金ヲ期待スルコトヲ得ル。會社ニ缺損ヲ見タルトキニサヘ貰ヘル例スラアル。デ此ニ於テ給料ノ意義ナシトイフハ當ラヌ。併シ之ヲ以テ全然給料ト同一ト見ルノハ當ヲ得ヌ。假令常例トシテ凡ソ一定ノ金額ガ給與サルル場合ト雖モ、尙ホ時ノ事業成績ノ如何ニヨツテハ多少變更ガ行ハレ得ル。必スシモ使用人ノ勤惰ノミニ依ラズ、外界ノ景況ニ支配セラレテ、非常ニ利益ノ多カツタトキハ増加セラレ、利益ノ少ク又ハ缺損トナツタトキハ減少セラルル

コトアルヘキモノデアリ、又實際ニモ斯クナツテ居ル。多クノ場合此ニハ給料以外、利益配當ノ意義アリトイハナケレバナラス。斯クテ右ノ賞與金中ノ一部ハ會社ノ利益中ヨリ配當サレタモノト見做シテ第一種所得稅ヲ課シ、其殘部ハ會社ノ損金ト見做シテ第一種所得稅ヲ課セナイコトトシ、併シ使用人ノ處ニテ給料ト並テ手當金トシテ第三種所得稅ヲ課スルコトトスヘキモノト思フ。但ダ此賞與金中ノ右ノ兩分ヲ何ニヨツテ決定スルカガ問題デアル。新判例ノ如キ利益金ノ處分タルコトノ明ナル證據ノ有無デハ此標準トナルニ足ラスコトハ、右述セルガ如ク、所謂利益金ノ處分タルコトノ明ナル證據アリトイフヘキ場合ニモ、尙ホ賞與金中ニ給料ノ分子アリトイハザルヲ得ザルニ依テ明カデアル。是ニ於テカ予ハ敢テ過去前三年間(即チ六半年期)ノ賞與金ノ平均額ダケハ準給料ト見做シテ、會社ニ於テハ損金額トシ、第一種所得稅ヲ課セス、右平均額ヲ超過スル賞與金ハ之ヲ利益中ヨリ配當サレタルモノトシテ之ニ第一種所得稅ヲ課スルコトトスヘキモノト思フ。此平均額ヲ超エタルモノハ確カニ給料デハナク、全ク利益配當ニ外ナラスカラ、之ニ會社ノ處デ第一種所得稅ヲ課スルコトハ毫モ妨ゲナイ。而シテ他方夫ノ平均賞與金額ハ、使用人ノ處ニテ給料ト共ニ手當金名義ニテ、第三種所得稅ヲ課稅サルヘキデアル。第二種所得稅ノ手當金ハ豫算ニ依ルヘキモノデアルガ、此平均率カラ割出サレタル賞與金ナレバ、豫算ガ立チ隨テ使用人ニ於テ申告スルコトヲ得ル。尤モ申告シタ後、其事業振ハズシテ其平均率ダケノ賞與金ノ得ラレザリシ場合ニハ、此ガ夫ノ四分一減少ノ條件ダニ充タセバ、稅法四〇條ニヨリ更訂ノ特典ニ浴スルコトヲ得ル。デ會社ノ使用人モ此位ノ負擔ヲスルノハ當然デアツテ、夫ノ鐵道院吏員ノ賞與

金ナドト比較シテモ當サニ負擔シテ然ルヘキモノデアル。

此ニ一ツ計算上問題トナルノハ、會社ニ於ケル損金額決定ノ爲メノ、過去前三年間ノ賞與金ノ平均額ノ計算法デアル。ガ此ハ單純ニ或會社ノ使用人ノ賞與金ノ前三年間ノ平均トイフヘキモノデハナク、ムシロ各年ニ於ケル右賞與金ノ給料(其實與金ヲ受クル使用人ニ屬スル)ニ對スル割合ノ平均ニ依テ、當該年ノ其使用人ノ給料ニツキ計算シタルモノトスヘキデアル。其ウデナイト、即チ單純ニ前三年間ノ賞與金ノ平均トイフコトニスレバ、其會社ガ發展シテ其使用人ガ前ヨリモ増加シ、其使用人ノ給料ガ増加シタル場合ニハ、夫ノ平均額ナルモノガ當該年カラ見レバ過小ナリ、隨テ會社ノ負擔スヘキ課稅額ガ不當ニ大キクナルノ恐ガアル。

(二)判例及之ニ附帶シタル原被兩造ノ主張答辯ニ對スル批評——

(A)利益ノ一部トスルノ說中

(イ)夫ノ賞與金ハ會社ニ益金ナキトキハ其債務ヲ發生セズトイフ說——ニ對シテハ、賞與金ハ本ト會社ト使用人トノ間ニ契約ニテ定メタルモノニ非ズ、假令之ヲ內規ニテ利益金ノ一定歩合ト定メタル場合ト雖、尙ホ且ツ單ニ會社ガ便宜上一ノ標準ヲ定メタルニ止マリ、之ニヨリ法律上會社ノ義務トシテ支給セサルヘカラザルコトナルモノデナイカラ、益金アリタリトテ支給ノ義務ヲ發生スルコトナク、隨ツテ又益金ナキガ爲メノ故ニ支給ノ義務ヲ生セサル譯デハナイ。全ク其義務ハ慣例ニ依ル德義上ノ義務トイフヘク、之ヨリスレバ益金ナキ場合ニモ多少ハ支給スルノ義務アルコトニナル。益金ガナイカラトイフテ、之ヲ支給シナクレバ、使用人ハ時ニ大ニ困マルコ

トニナラナケレバナラス。實際ニモ會社缺損ノ場合ニスラ、多少ハ支給サレテ居ルト答ヘナケレバナラス。

(ろ) 賞與金ハ會社ノ損益ノ有無如何ニ拘ラズ會社ノ義務トシテ支給スベキモノニ非ストノ説——ニ對シテハ、之ハ法律上ノ義務トイフコトヨリ見レハ正當ノ解釋デアルガ、德義上ヨリイヘバ、ムシロ會社ニ之ガ支給ノ義務アリト見ルヘク、少クトモ其一部ハ會社ノ損益如何ニ拘ラズ支給スルノ義務アルモノデ、單ニ會社ニ之ガ支給ノ法律上ノ義務ナシトノ故ヲ以テ、凡ヘテ此カ會社ノ利益中ヨリ支拂ハルルモノトインコトハ出來ナイトイハナケレバナラス。

(は) 賞與金ハ純ラ會社ニ利益アル場合ニ限り給與スヘキモノトノ説——ニ對シテハ、實際利益ナキトキニモ此ガ支給サルコトガアリ、又而カアルヘキモノナルコトニ依テ否定スルコトガ出來ル。何トナレバ會社使用人ノ給料ハ通例割合ニ低ク定メラレテ、一部ハ此賞與金ニヨリ補ハルルトイフ慣例ニナツテ居リ、會社モ賞與金ノ一部ヲ給料ノ積リニテ支給シ、使用人モ其積リニテ受取リツツアルカラ。

(に) 賞與金ハ事業年度ノ末日ニ支拂フニヨリテモ利益中ヨリ支給サルモノナルコトヲ推定スヘシトノ説——ニ對シテハ、之アルカ故ニ其賞與金ガ全然、利益中ヨリ支給サルモノトイフコトヲ得ナイトイハナケレバナラス。成程之ニヨリテ其一部カ利益ノ配當ナルヘシトハ推定サルガ、然シ利益ノ配當タラスシテ寧ロ給料ノ一部ト見ルヘキモノト雖モ、尙且ツ月々又ハ日々支給セラレズシテ、事業年度末ニ至テ支給サルコトガ出來得ル所デアル。

(は) 賞與金額ガ常ニ同一ナラザルノ故ヲ以テ利益配當ナリトスルノ説——ニ對シテハ、成程利

益配當ハ、動搖性ヲ有スルニ相違ナイガ、然レバトテ動搖的ナルモノガ凡ヘテ利益配當トハイヘナイトイハナケレバナラヌ。給料ト雖モ外界ノ事情ニヨリテ動搖スルコトノアルヘキモノデアル。

(B) 給料ニ準スルモノトスルノ説中

(イ) 會社使用人ノ給料が通例少額ナルノ故ニ賞與金ハ此補充ナリトノ説——ニ對シテハ、成程大體ニ於テハ斯カル理由ニヨリ賞與金ガ給料ノ一部タリトイフコトヲ得ルモ、必スシモ其賞與金ノ全部ガ給料ノ一部タリトイフコトハ出來ナイ。實際賞與金ニ給料以上、利益配當ノ意義モ加ハリ得ル。

(ロ) 賞與金ガ會社ニ利益ナキ場合缺損ヲ見タル場合ニモ支給サルルコトアルノ故ニ、給料ト同也トイフ説——ニ對シテハ、如何ニモ此ガ給料ノ一部ヲ成スモノアルコトヲ證スルニハ足ルモ、然リトテ利益アル場合ニ特ニ利益ノ大ナリシ場合ニ、支給サルル賞與金モガ凡ヘテ給料ニ外ナラズトハ過キタリトイハナケレバナラヌ。

(ハ) 賞與金ガ配當決議前ニ支給サルルノ故ニ利益配當ニ非ズトノ説——ニ對シテハ、此ハ手續論ニ過ギナイ。右ハ當該會社ガ商法所定ノ手續ヲ履マナカツタニ止マルトモ見ルコトガ出來ルトイハナケレバナラヌ。配當決議前ニ支給サルルモ、利益ヲ豫想シテ配當シタトモイフコトガ出來、配當決議ニ際シテ支給サレタニシテモ、此際給料ノ一部ヲ決定スルコトモ出來ル。

(ニ) 賞與金ハ損益ノ如何ニ拘ハラズ給與スルモノナルガ故ニ給料ト同一也トノ説——此點ハ一應ハ認メラルルガ、併シ損ノアルトキト、益ノアルトキト、更ラニ其益金ノ小ナルトキト大ナルトキトノ間ニ支給サルル賞與金ニ大小等差ガアツテ、時ニ其ノ著シキモノアル以上ハ、假令給料

ニモ動搖性ハアルニセヨ、此賞與金ヲ以テ凡ヘテ給料ニ過ギズトイフハ誤ツテ居ル。此ニ給料以外ノモノノ之アルコトヲ否ムコトハ出來ナイ。

(ハ)賞與金ガ每事業年度支給サルノ故ニ、利益ヲ條件トシテ支給サルモノニ非ズトノ説——成程一應ハ之アルガ故ニ利益ノ有無ニ拘ラズ支給サルモノノ如クデアル。併シ實際利益ノ大ナルトキ大ナル賞與金ノ與ヘラルコトアル以上ハ、利益ヲ條件トシテ支給サル部分モアルトイハナケレバナラヌ。

(ヘ)賞與金ノ給與ガ利益ノ處分タルコトヲ認ムヘキ何等ノ證據ナキ場合ニハ、此ガ利益配當ニ非ストノ説——併シ斯カル證據アリタレバトテ必ズシモ賞與金ガ凡ヘテ利益配當トハイヘナイ。又右ノ證據ナクトモ利益配當トイフコトノ出來ル場合ガアル。夫ノ證據トイヘバ、事業年度ノ損益決議ニヨツテ支出スルトカ、每事業年度ノ利益金ノ一定歩合ヲ配當スルコトトシタ場合デアラウガ、夫ノ事業年度ノ損益決議ノ際ニ給料ニ當ルモノヲ定ムルコトモ出來、名義上、每事業年度ノ利益金ノ一定歩合ヲ配當スルトイツタカラトイフテモ、其中ニハ給料ニ過ギザルモノガ籠テ居ルト見ルコトガ出來ナイコトハナイ。又事業年度ノ損益決議前ニ支出シテモ、利益ヲ豫想シテ其配當ニ屬スルモノヲ支給スルコトモ出來、每事業年度ノ利益金ノ一定歩合トイフコトヲ明示セナイデモ、賞與金ノ中ニ利益配當ガドシドシ行ハルコトモ出來得ル。

(ロ)賞與金ガ每期略ホ同額ノ給與ヲ爲スノ故ニ利益ノ處分ニ非ストノ説——併シ略ホトイヒ多少ノ變動ヲ認ムル處ニ、利益ノ配當タル可能ガアル。

(下) 立法論トシテ

右ノ如クニシテ現行法ノ解釋ハツキ、他ノ條項トノ調和モ取レルト思フガ、其ニシテモ現行法ノ文字ニ於ケル損金ガ夫ノ如ク解釋出來ルカニハ疑ナキヲ得ナイ。是ニ於テカ

(一) 應急策

適當ト考フル。

トシテハ其損金ノ意義ヲ明瞭ニスル爲メニ必要ナル説明的文言ヲ附加フルコトヲ

(二) 救治策

併シ斯クテモ會社ノ方デハ平均率ニ依リ計算サレタル使用人ノ賞與金ハ課税サレナイトシテ、其ニ當ルモノガ使用人ノ處デ十分ニ課税サルカトイフト、ツイ其ガ脱税サルコトニナリ勝デアル。其方ハ會社ノ申告義務ヲ伴ハシムルコトニヨリ防クコトガ出來ルトシテモ、平均率ヲ超ユル所ノ大ナル賞與金ガ單ニ會社ノ處デ低イ税率ノ適用サルルニ止マルノハ、負擔ノ公平ニ適ハヌ。デ之ヲモ凡ヘテ使用人タル自然人ノ處デ公平ナル累進課税ヲ負ハシメタイ。其ニハ現行法ノ種別課税ヲ廢シテ、自然人ヲ中心トシテ之ニ入り來ル凡ヘテノ所得ヲ全體トシテ累進課税シ、隨テ使用人ノ給料賞與金ヲ合一シテ其大小ニ應シタル課税ヲ爲シ、而モ現行法ノ豫算主義ニ依ラズ、獨逸ノぞくせん、ぶゆるてんべるひ、ぶろいせんニ行ハルル前年度ノ實額ニヨルノ主義ヲ採ルコトトスレバ、凡ヘテ平均以上ノ大賞與金ヲモ使用人ノ處ニテ公平ニ課税スルコトノ出來ルコトニナル。勿論斯ノ如ク自然人課税ヲ主トスルコトトシテモ、別ニ獨逸各邦ニ其例ノ多キ如ク、會社ノ一定歩合(例之普魯西百分三、半)以上ノ利益金ニツキテハ會社ノ處ニテモ課税スルコトトスルガ必要デアラウ。尙又右ノ自然人中心課税主義ヲ採ルコトニヨツテ、會社重役輩ノ受クル巨大ナル賞與金ガ適當ニ重キ累進課税ヲ負ハサルコトトモナリ、以テ今日ノ不公平課税ヲ矯正スルコトガ出來ヤウ。